

1. 研究主題 「地域に根ざし、子どもに根ざした生活科の授業づくり」

2. 研究の概要

*

本年度は、平成26年10月30日、31日に春日小学校・高志小学校を会場に開催された平成26年度第23回全国小学校生活科・総合的な学習教育研究協議会新潟大会への参加、運営支援を中心に実践研究を進めることとした。公開授業に学びながら地域の学習材を活かした単元開発、主体的に学ぶ活動構想、教師の支援の在り方等について研究を深めたいと考えた。

*この大会は、平成24・25・26年度新潟県小学校教育研究会指定生活科研究大会、平成26年度第31回新潟県生活科・総合的学習研究会研究大会も兼ねている。

3. 研究の実際・・・研究会公開授業から

(1) 春日小学校 公開授業の紹介

〈1年 「ヤギさんとなかよし」〉 授業者 金子 鮎美 教諭 井守 千秋 教諭

友達と協力しながら「さくらっこランド」を作り上げていく活動を通して、ヤギへの愛着を深めていくことをねらいとした単元の授業であった。

〈参観レポートから〉

- ・中庭のヤギを取り巻く環境からも春からのヤギと子どもたちのかかわりをうかがうことができた。ヤギも大切な仲間と感じている子どもたちの気持ちが伝わってきた。
- ・活動している子どもたちの視野にヤギがいるので、ヤギの反応を直にとらえながら考えていた。動物と同じ空間で活動する環境構成はとても参考になった。
- ・園児にという明確な相手意識をもたせることで、活動意欲も高まり、「伝えたい」「教えてあげたい」という気持ちがヤギへの愛着を深めることにもつながっていた。

〈2年 「のぞみっ子畑のお野さいさん2～野さいパーティーをしよう」〉

授業者 高橋 瑞恵 教諭 竹内 栄子 教諭

野菜栽培を振り返りながら、家族やお世話になった地域の方に感謝の気持ちを持ち、その気持ちを表すパーティーについて相談し合う授業であった。

〈参観レポートから〉

- ・春からの栽培活動の充実が子どもたちの言葉に表れていた。栽培活動で得た手応えがパーティーへの意欲を高めていると感じた。
- ・活動時の写真や綴られたシートが振り返りを容易にそして、深いものになっている。活動記録の大切さやそれらを生かす場の設定が大切であることを改めて感じさせられた。
- ・パーティーという楽しい活動にだけ走るのではなく、「感謝」や「おもてなし」「いっくしみ」といった気持ちや思いが子どもたちに意識づけられていた。明確な相手意識がそれを支えていた。

(2) 高志小学校 公開授業の紹介

〈1年 「やぎさんといっしょ」〉 授業者 野島 聡子 教諭 野上 幸代 教諭

「ありがとうの会」の相談や実施を通して、ヤギの立場に立った世話や自分とヤギとのかかわりを見つめ直すことをねらいとした授業であった。

〈参観レポートから〉

- ・活動の軌跡やヤギの成長が実感できる掲示、子どもとヤギが十分に触れ合える飼育小屋周辺の環境、自然環境等、学びを深める環境づくりが活動の充実を支えていた。
- ・個の追究を深めるために協同的な学びの場が大切にされている。気付きを共有し、学びの質が高まるように教師は問いかけ誘いかけ、子ども同士を上手に繋いでいた。

- ・自己決定の場やかかわわる時間の保証、「来てくれてありがとうの会」の毎月1回の設定、やぎ日記といった継続した探究的な活動が確かな学びの要因になっていることを感じた。

〈2年 「どきどき わくわく あじさいたんけんたい」〉

授業者 岩船 貴子 教諭 滝沢真紀子 教諭

通学路をベースにした秋の探検を楽しんできた子どもたちが、学級みんなで巡る「あじさい探検ツアー」のコースを相談したり、探検の振り返りから高志地域のよさや地域への思いを深めたりすることをねらいとした授業であった。

〈参観レポートから〉

- ・発表では様々なエピソードが話され、探検への思いの深さがうかがえた。通学路をベースにしているので、日々、新たな発見やかかわりが生まれ、生活の中に活動があることのよさを感じた。
- ・子どもの発言や思いをつなぐ教師の支援が絶妙であった。主体性を大切に、出過ぎず、子どもの心にある気持ちを引き出す問いかけを心がけていた。
- ・「人」や「もの」との偶然の出合いの中に必然の出合いも組み入れ、地域のよさや魅力、地域の人々のやさしさや温かさを子どもたちが実感できるような活動展開であった。工夫に学びたい。

4 研究の成果と課題・・・公開授業レポート、実践レポートを踏まえて

- ・**学習材と教師**・・・地域には豊かな「人・もの・こと」が存在する。それを学習対象として子どもがかかわっていく前に、教師の研究が必要である。その学習材に出会った時の探究活動や気付き等の可能性を事前に把握し、それらをベースにした活動展開を構想することが大切である。
- ・**気付きの共有化**・・・対象との繰り返してのかかわり、節目での振り返り等により活動の質が高まり、気付きも多様となる。また、気付きの共有化を図る場の設定は重要であり、共有化されることで、質的な深まりや広がり生まれ、新たな活動へのきっかけも生まれていく。
- ・**生活に重ねる**・・・飼育している動物や栽培している野菜等とのかかわりを中心にした日々の時程の工夫、紹介コーナーの設置、通学路をベースにした探検活動等、子どもの生活と活動を重ねる工夫をすることで、一層の充実を図ることができる。
- ・**体験したら「書く」を位置づける**・・・「書く」ことで対象への見方が整理されたり、自分の取組を振り返ったりすることができる。その積み重ねは、自分の考えや思いの変化、取組のよさに目がいくことになり、自分自身の成長への気付きにもつながる。
- ・**互恵性のある地域との連携**・・・地域のことを知るほど、子どもたちの地域とのかかわり、愛着は深まっていく。活動のねらいや構想を地域の方にも理解していただき、地域の方にも充実感のもてる取組にしていくことが必要である。「ともに」創り出す姿勢を大事にしたい。
- ・**幼・保との接続**・・・子どもたちが入学後、小学校生活にスムーズに適応していく上で生活科の果たす役割は大きいと考えている。保育園・幼稚園の支援を得ながら、スタートカリキュラムの作成にも部会として積極的に取り組んでいきたい。

本年度は、春日小学校、高志小学校の研究会に参加・協力する中で部員それぞれが授業を通して生活科について具体的に学ぶことができた。また、全国からの参会者と意見交換情報交換する場も得ることができ、上越の生活科のよさや課題、これからの在り方について考える機会ともなった。今年度の成果を踏まえ、今後も地域に根ざし、子どもに根ざした上越の生活科を実践していきたい。